安龍寺の沿革

山号　洞雲山
寺号　安龍寺
本尊　阿弥陀如来
開山　日杲良吉大和尚（にっこうりょうきち）

曹洞宗の前は真言宗で瀧見寺（りゅうけんじ）と称し、観音菩薩を本尊としていた。

明治十六年十二月二十六日（旧暦）本堂、庫裏が火災にて全焼。当時の住職死亡。

復興　安龍寺の弟子で福島県会津常楽寺の住職であった大全方丈のもと再建する。

再建後、中興開山智良大全大和尚

「冷暖自知」（れいだんじち）

水の冷暖は、その水を飲んで初めて知ることができる、という意味です。禅の道は体験なくしては得られないということを、水にたとえていっていることばです。

（禅の友　２０１８年９月号より）

聞いた「知る」と体験した「知る」は別物

仏教も実践が大事

道元禅師の中国留学中のエピソード（別紙参照）

平成三〇年九月二十六日　安龍寺　齋藤隆光

『正法眼蔵随聞記』三―七

七　我れ在宋の時禅院にして古人の語録を見し時

一日示ニ云ク、我レ在宋の時、禅院にして古人ノ語録を見シ時、ある西川の僧の道者にて有リしが、我レニ問ウテ云ク、「なにの用ぞ。」

云ク、「郷里に帰ツて人を化せん。」

僧云ク、「なにの用ぞ。」

云ク、「利生のためなり。」

僧云ク、「畢竟じて何の用ぞ。」ト。

予、後にこノ理を案ずるに、語録公案等を見て、古人の行履をも知り、あるいは迷者のために説き聞かしめん、皆是レ自行化他のために無用なり。只管打坐して大事を明ラめ、心ノ理を明ラめなば、後には一字を知ラずとも、他に開示せんに、用ひ尽クスベカラず。故に彼の僧、畢竟じて何ノ用ぞとは云ひけると、是レ真実の道理なりと思ウて、そノ後語録等を見る事をとどめて、一向に打坐して大事を明ラめ得たり。

〔口語訳〕

ある日、教えて言われた。

わたしが宋にいた時のこと、坐禅の道場で古人の語録を読んでいた。その時、ある、四川省出身の僧で道心あつい人であったが、この人がわたしにたずねて言った。「語録を見て何の役に立つのか。」

わたしは言った。「くにに帰って人を導くためだ。」

その僧が言った。「それが何の役に立つのか。」

わたしは言った。「衆生に利益を与えるためである。」

僧はさらに言った。「結局のところ何の役に立つのか。」と。

わたしはあとで、この問いの道理を考えたが、語録や公案などを読んで古人の行ないの跡をも知り、あるいは迷っている人のためにその内容を説いて聞かせるなどのことは、みなこれは、自分の修行の上でも、他人を導く上でも、いらないことである。ただひたすら坐禅して一生参学の大事を明らめ、仏法に説くところの心の道理を明らかにしたなら、そのあとは、一文字も知らなくても、人に教え示すのに使い尽くせないほどである。だからあの蜀地の僧が、結局のところ何の役に立つのかと言ったんだなと思い、これはほんとうの道理であると思って、その後は、語録などを読むことはやめ、ひたすら坐禅に徹して、一生参学の大事を明らかにし得たのである。

（ちくま学芸文庫『正法眼蔵随聞記』水野弥穂子　訳）